

綱領・古典の連続教室

古典教室の第10回（2011年12月6日）、

第11回（2012年1月）で使う

「エンゲルス 多数者革命」のテキストです。

テキストは、『古典選書 エンゲルス 多数者革命』からとりました。最初の「文献解説」は、編集者の不破が執筆したこの文献の背景説明です。エンゲルスのテキストの本文は、3ページ目から始まります。

段落ごとの番号は、講義用につけたものです。

エンゲルス マルクス『フランスにおける階級闘争』一八九五年版への序文

〔文献解説〕 エンゲルスは、一八九五年二月、マルクスが一八五〇年に雑誌『新ライン新聞』政治経済評論』に掲載した連続論文「一八四八年から一八四九年まで」を単行本にまとめることを計画した。この連載論文は、三回連載したところで中断していたため、エンゲルスはこの雑誌の最終号のマルクス、エンゲルスの共同論文「評論。〔一八五〇年五月一〇日〕」のフランス関係の部分を抜き取ってこれを第四章とし、『フランスにおける階級闘争 一八四八年から一八五〇年まで』と題して出版した（九五年四月）。

マルクスのこの著作の出版にあたって、エンゲルスはこの「序文」を執筆した。「序文」の最初の部分で、この著作そのものについての解説をおこなったあと、エンゲルスは、二つの大きな問題について自分の考察を展開した。

第一は、一八四八年の二月革命当時、マルクス、エンゲルスが来るべき革命についてどのような考えを抱いていたか、そのどこに誤りがあったか、そしてその後の活動の過程で自分たちがどのような革命観、革命論を発展させてきたか、この問題に正面から取り組んだ歴史的検討である。その考察は、ドイツの党が果たしてきた先駆的な役割に大きく光を

あてながら、ヨーロッパの社会主義運動全体に視野を広げつつ、多数者革命論をまとめた形で展開するものとなった。

第二は、多数者革命の先頭に立っているドイツの党が当面する革命闘争の問題である。人民の多数者の支持を獲得しつつ革命に進むという路線は共通でも、主権在民と議会制民主主義の政治体制が確立している国ぐにと、議会はあっても権限をもたない専制的君主制の国とでは、革命に接近する方法や形態は根本的に違ってくる。ドイツはまさに後者に属する専制国家であり、議会で多数を得た場合でも、それで労働者階級の前に権力獲得の道が制度的に開かれるわけではなかった。そこでは、当然、支配権力と革命的多数派との衝突が不可避であり、その情勢をどのように迎えるか、明確な方針をもつことがドイツの党には迫られていた。

エンゲルスは、一八九一年のエルフルト党大会を前にして、党指導部にこの問題を提起したが、党指導部からの反応はなかったようである。そのなかで、エンゲルスは、大会後に執筆した「ドイツにおける社会主義」（本書収録）のなかで、党が進むべき道をごく簡潔な形で示した。

「序文」は、後半部分で、この問題についてのエンゲルスの考察を、より詳細に、体系だつて説明している。当時、社会主義者取締法はすでに撤廃され、過去のものとなっていたが、エンゲルスは、表現には極力注意を払いながら、しかしこの核心はきちんと読者に理解されるように、論を展開した。

しかし、この「序文」の発表にたいし、ドイツの党執行部は、政府が新しい「例外法」〔★〕を用意していることを理由に、強い抵抗をおこなって、エンゲルスを驚かせた。まず、党の出版担当者から、一連の箇所では表現を緩和してほしい、という要請が寄せられ、エンゲルスは、かなりのところまで文章や字句の削除を認めた（この選書では削除箇所をへ～で示した）。

これのことですんだかと思うと、そうではなかった。単行本が発行される前に、党指導部は、エンゲルスの「序文」の予告的な解説を、中央機関紙「フォルヴェルツ」三月三〇日付に発表した。ここでは、「序文」からの抜き書きが掲載されていたが、ここでは「僕がなにがなんでも合法性の穏健な熱愛者であるかのように刈り込み」がやられていた（エンゲルスからカウツキーへ 九五年四月一日 全集③三九四ページ）。エンゲルスは対抗措置として、理論雑誌『ノイエ・ツァイト』への「序文」の全文転載の手配をしたが、発行部数でいえば、理論雑誌も単行本も、党機関紙に及ぶものではまったくなかった。

なお、エンゲルスが「序文」後半で展開した革命の戦術論は、ドイツの当面の情勢に対応するための限定的なもので、社会革命の一般論ではもちろんない。ドイツの党のやり方を批判しながら、「序文」で述べた戦術論の限定的な性格を説明したエンゲルスの一文を紹介して、この文献説明の結びとする。

「リーブクネヒトは僕に語りつばないたずらを最近やったばかりです。彼は、一八四八、五〇年のフランスにかんするマルクスの諸論文への僕の序文のなから、なにがなんでも

平和的、反強力的という戦術を支持するのに役立つようなところだけを抜き出したのです。この戦術は、彼がしばらくまえから、とくに、ベルリンで例外法が準備されているいまの時期に、説教したがっていたものです。しかし、こういう戦術を僕が説いているのは、今日のドイツにたいしてだけで、しかもなおいぢるしい留保を加えています。フランス、ベルギー、イタリア、オーストリアには、この戦術は全体としてはむいていません。そしてドイツにも、あすは適用不可能になるかもしれません。だから、判定をくだすまえに、どうか全文を待ってください」(エンゲルスからポール・ラファルグへ 九五年四月三日 全集³⁹ 三九八ページ)。

- (1) ここにあらたに出版される著作は、マルクスが彼の唯物論的な見解によって現代史の一時期を、与えられた経済状態から説明しようとした最初の試みであった。「共産党宣言」では、この理論が、大ざっぱに近代史全体に応用されたのであり、「新ライン新聞」(★2)紙上のマルクスと私の諸論文では、この理論が当時の政治的諸事件を説明するためにたえず利用された。ところが本書で扱う問題は、数年にわたる、全ヨーロッパにとって危機的でもあり典型的でもあった発展をつうじて、その内的な因果関係を証明することであった。すなわち、著者の考えでは、政治上の事件を究極において経済的な原因の作用に還元することであった。
- (2) 今日の歴史における諸事件や事件の系列を判断する場合に、究極の経済的原因にまでさかのぼることは、とうていできないことであろう。それぞれの専門の刊行物が、すこぶる豊富な材料を提供してくれる今日で

も、しかもイギリスにおいてさえも、世界市場における商工業の進行と生産方法に生じる変化を日々追究して、さまざまにもつれあい、たえず変動する、これらの諸要因から、あらゆる任意の時機に、一般的な総括をひきだせるようにすることは、不可能なことであろう。おまけにその諸要因のうちでも、もつとも重要なものは、たいてい長いあいだ隠れた状態で作用したのちに、突然表面に荒々しく現われてくるものだから。ある一定の時期の経済史にかんする明瞭な概観は、けっして同時代には得られないで、ただ後日になって材料を集め、それを精査してはじめて得られるものである。統計はそのさいには得られない補助手段であるが、それはいつもおとくやとやってくる。だから現に進行中の時代史を書く場合は、この要因、もつとも決定的な要因を、恒常的なものとして取り扱い、その時期のはじめに見いだされる経済状態を、全時期にわたって存在している不変なものとして取り扱うか、それともまた、目前にはつきりと存在する出来事自体から生じ、したがって同様にはつきりと現われている経済状態の変化だけを考慮するよりほかにしかたがないことがあまりにもしばしばである。だからこの場合には、唯物論的方法は、きわめてしばしば次の点に限定されざるをえないだろう。すなわち、政治的闘争を、経済的発達から生じた現存の社会階級および階級分派間の利害の闘争に還元すること、そして個々の政党が、これらの階級や階級分派の多かれ少なかれ適当な表現であることを証明すること、これである。

(3) 研究すべきすべての出来事の本来の基礎である経済状態の、同時に起こる諸変化が、このようにやむをえず無視されることが、誤謬の一つの源泉とならざるをえないことは言うまでもない。しかし今日の歴史の総括的な叙述のためのあらゆる条件が、不可避免的に誤謬の源泉をふくんでいるのだ。けれども、そのために今日の歴史を書くことを思いとどまるといふ者はない。

(4) マルクスがこの著述を企てた当時は、上述の誤謬の源泉は、なおいつそう避けがたかった。一八四八〜四九年の革命のあいだに、同時的に起こっている経済上の諸変化を追究したり、そのうえそれらの変化についての概観も見失わないということは、まったく不可能なことであった。ロンドン亡命の最初の数カ月間、すなわち一八四九年から五〇年にかけての秋と冬においても事情は同じであった。ところが、まさにこのときに、

マルクスはこの著述に着手したのである。そしてこのような不利な状況にありながら、マルクスは、二月革命以前のフランスの経済状態や二月革命以後のフランスの政治史の正確な知識をもっていたので、みごとに諸事件の叙述を成しとげることができた。その叙述は、それ以後も及ぶもののないほどに当時の諸事件の内的関係を明らかにしており、のちにマルクスが自分で課した二度の検証にも、みごとに及第したものであった。

(5) 第一回の検証は、一八五〇年の春以来、マルクスがふたたび経済学研究の余暇を得て、最初にまず最近一〇年間の経済史に着手したことによってなされた。この研究によって彼がこれまで不備な材料にもとづいて、半ば先験的に結論していた次のことが、事実そのものから完全にマルクスにはつきりしてきた。すなわち、一八四七年の世界的商業恐慌が、二月と三月の革命のほんとうの生みの親であったこと、そして一八四八年の半ばからだんだんに回復し、一八四九年と一八五〇年に全盛に達した産業の好況が、あらたに強化したヨーロッパの反動を活気づけた力であったということである。それは決定的なことであった。最初の三論文（『新ライン新聞。政治経済評論』一月、二月、三月号、ハンブルク、一八五〇年）には、まもなく革命のエネルギーがあらたに高揚するだろうという期待がまだ全文に見られるが、最後の一八五〇年秋発行の合併号にマルクスと私が執筆した歴史的概観（五〜一〇月）のなかでは、すでにきっぱりとこうした幻想を捨てている。「新しい革命は新しい恐慌につづいてのみ起こりうる。しかし革命はまた、恐慌が確実であるように確

文の序へ

(6) 第二回の検証はもっと厳格なものであった。一八五一年二月二日のルイ・ボナパルトのクーデタのすぐ

あとで、マルクスは、一八四八年二月から、革命の時期をしばらく閉ざしたこの事件にいたるまでのフランスの歴史を、あらためて研究した（『ルイ・ボナパルトのブリュメール一八日』第三版、ハンブルク、マイスナー書店、一八八五年）。その小冊子には、本書のなかに述べられている時期が、より簡略にはあるが、ふたたび取り扱われている。一年以上のちに起こった、あの決定的事件に照らして書かれたこの二度目の記述を、本書の記述と比較してみれば、著者が変更しなければならなかった箇所はきわめてわずかであったことがわかるだろう。

(7) なお本書にかくべつ重大な意義を与えている点は、世界のすべての国の労働者党があまねく一致してその経済的改革の要求を簡単に要約している公式、すなわち、社会による生産手段の取得を、本書がはじめて言明したという事情である。第二編に「労働の権利」をさして「プロレタリアートの革命的要求をまとめた最初の無器用な公式」と称している箇所、マルクスは次のように述べている。「しかし、この労働の権利のうしろには、資本にたいする強力があり、資本にたいする強力のうちには、生産手段の取得、結合した労働者階級の支配下に生産手段をおくこと、すなわち賃労働と資本、およびこの両者の相互関係の廃止がある」と。だからここに——はじめて——それによって近代の労働者の社会主義が、さまざまな色合いをもつ

マルクス「フ

エンゲルス

スにおける階級闘争」一八九

た封建的、ブルジョア的、小ブルジョア的等々の、すべての社会主義とはつきり区別され、そしてまたユーロピア的または原生的な労働者共産主義の混沌たる財産共有制とも、きっぱり区別される命題が定式化されている。のちにマルクスはこの公式を交換手段の取得にまで拡張しているが、この拡張は『共産党宣言』によっても自明のことであるが、さきの主要命題から必然的にでてくる帰結を言い表わしたものにすぎない。それから最近イギリスの二、三の賢者が、これにつけくわえて、「分配の手段」も社会に引き渡すべきだと言っているが、生産手段および交換手段と区別されるこの経済的分配手段とは、それが租税や貧民救助——ザクセンヴァルト〔★4〕その他の財産贈与をふくめて——などの政治的分配手段を意味していないとするならば、いったいなんのことであるかは、これらの紳士諸君も実は答えに窮するだろう。ところが、これらものは第一に、今日すでに全体ゲザムトの、国家あるいは自治体の、所有する分配手段であり、また第二に、われわれはまさにこれらのものを廃止しようと欲しているのである。

(8) 二月革命が勃発したときは、われわれすべてのものが、革命運動の条件や経過についてのわれわれの考えにおいて、それまでの歴史的経験に、とくにフランスの歴史的経験に、とらわれていた。このフランスの歴史的経験こそは、まさに一七八九年以来の全ヨーロッパの歴史を支配してきたものであり、こんどもまた全般的変革への信号がそこから発せられてきたからだ。そこでパリで一八四八年二月に宣言された「社会」革命の、プロレタリアートの革命の、性質や経過についてのわれわれの観念も、一七八九—一八三〇年のお手本の記憶に強く色どられていたことは言うまでもないことであり、避けがたいことでもあった。しかもその

うえ、パリの蜂起が反響をよんで、ウィーン、ミラノ、ベルリンの勝利した蜂起となって現われ、ヨーロッパ全体がロシアの国境にいたるまで運動の渦中かちゅうにまきこまれたとき、ついで六月にパリでプロレタリアートとブルジョアジーのあいだに支配権争奪の最初の大戦闘がたたかわれたとき、そして、自分の階級の勝利でさえ万国のブルジョアジーをひどく驚かせたため、彼らが、たつたいまくつがえされたばかりの君主主義的封建的反動の腕のなかへふたたびのがれかえったとき、われわれにとっては、当時の情勢のもとでは、次のことは疑いの余地がありえなかった。すなわち、偉大な決戦が始まったこと、この決戦はただ一つの長期の、変転に満ちた革命期をつうじてたたかぬかれなければならないこと、しかしそれはプロレタリアートの究極の勝利をもつてのみ終わらうものであることである。

(9) われわれは、一八四九年の敗北後は、名義上の臨時未来政府〔★5〕のまわりに集まった俗流民主主義者のいづく幻想をすこしももつてはいなかった。彼らは「圧制者」にたいする「人民」の、早期の、きつぱりと決定する勝利を予期していたが、われわれは「圧制者」を排除したのちに、まさにこの「人民」のなかに隠れている対立的要素のあいだの長期の闘争を予想していた。俗流民主主義者は、きょうかあすにもあらたな革命が勃発することを期待していた。だが、われわれは、すくなくとも革命期の第一局面は終わったこと、そして新しい世界経済恐慌が勃発するまでは、なにごとく期待できないということ、すでに一八五〇年秋に声明したのだ。そのためにわれわれはまた、これらの人々から革命の裏切者として破門されたのである。ところが、これらの人々は、そののちほとんど例外なしにビスマルクと妥協したのである——もつとも、それはビスマルクが妥協する価値がある相手だと彼らを認めたかぎりにおいてであるが。

(10) しかし、歴史はわれわれの考えをもまた誤りとし、当時のわれわれの見解が一つの幻想であったことを暴

露した。歴史はそれ以上のことをした。歴史はわれわれの当時の誤りを打ち破ったばかりでなく、プロレタリアートが闘争すべき条件を、すっかり変革してしまった。一八四八年の闘争方法は、今日では、どの面でも時代おくれとなっている。この点は、この機会にもっと詳しく調べてみる価値のあることだ。

(11) これまでの革命はいずれも、結局は一定の階級支配を排除して、他の階級支配がこれに代わることであった。しかし、これまでの支配階級はすべて、支配される人民大衆にたいしてわずかな少数者にすぎなかった。で、一つの支配する少数者が打倒されると、他の少数者がこれに代わって国家権力をにぎり、自分の利益に合わせて国家諸機関を改変した。それは、いつの場合でも、経済的発達の状態によって支配しうる能力を得、支配の使命をもたされた少数者の集団であった。まさにそのゆえに、そしてただそれだけの理由で、支配された多数者がこの少数者に味方して革命に参加するか、あるいは参加しないまでも革命をおとなく甘受したのだ。しかし、そのときどきの革命の具体的内容を度外視すれば、それらの革命の共通の形式は、みな少数者の革命であったということである。多数者が革命にくわった場合でさえ——知ってにしろ、知らないでにしろ、——それは少数者に奉仕したにすぎない。ところが、そのために、あるいはまたすでに多数者が受動的に無抵抗的な態度をとったということのために、その少数者はまるで全人民の代表のように見えただけであった。

(12) 最初の大きな成功のうち、勝利した少数者は分裂するのが常であった。その半数は彼らの獲得したものに満足したが、他の半数はもっと前進しようと欲して新しい要求を掲げた。それらの要求は、すくなくとも部分的には大きな人民大衆のほんとうの利益になるものであるか、それとも一見そう見えるものであった。こういう、より急進的な要求も個々の場合には貫徹されもしたけれども、多くの場合それは一瞬間だけのことであった。もっと温和な党派がふたたび優勢となって、最後に獲得された成果は、全部かまたは一部分ふたたび失われていった。そして敗北者は裏切りよばわりをし、あるいは敗北を偶然のせいにした。しかし実際の事情はたいてい次のとおりであった。すなわち、最初の勝利で獲得された成果は、より急進的な党派の第二回の勝利によつてはじめて確立されたのであり、それが確立され、目前の必要事が達成されると、急進派と彼らの成果はふたたび舞台から姿を消したのである。

一七世紀のイギリスの大革命(★6)に始まった近代のあらゆる革命が、こうした特徴を示した。この特徴はどんな革命的闘争とも不可分のようにみえた。それはプロレタリアートの自己解放のための闘争にもあてはまるようにみえた。それは、まさに一八四八年にはどういう方向にこの解放を求めるべきかをいくぶんでも理解していた人は、ほんの少数にすぎなかっただけに、なおさらそうであった。プロレタリア大衆自身が、パリでさえ、勝利ののちにも、まだとるべき進路について全然わかっていなかった。にもかかわらず運動は起こされた——本能的に、自然発生的に、抑圧しがたく。これこそまさに一つの革命が——なるほど少数者に指導されてはいるものの、こんどはその少数者の利益のためではなくて多数者の本来の利益のための革命が——必ず成功しなければならぬはずの情勢ではないか? かなり長期のすべての革命期に、前へ前へとおすすめる少数者の、もっともらしい、ただの甘言によってさえ、人民大衆が容易に獲得されたとするならば、彼らの経済状態のもっとも固有の反映である思想、彼ら自身はまだ理解しないで、わずかに漠然と感じているにすぎない要求を、明白に合理的に表現しているものにほかならない思想が、どうしてそれより受け入れにくいはずがあるのか? なるほど大衆のこういう革命的気分は、幻想が消えうせて失望を生じるやいなや、ほとんどつねに、そしてたいていは急速に、疲労困憊にかわるか、または反対の気分さえ

逆転したものであった。が、しかし、この場合はもはや見せかけの甘言ではなくて、大多数者自身の、もつとも本来の利益の貫徹が問題となっていた。なるほどこの利益は、当時はこの大多数者が、けつしてはつきりと理解していなかったけれども、実際に実現の途上で自分の眼で見て納得し、たちまちはつきりとそれを理解するにちがいないものであった。さて、そのうえさらに、マルクスが第三論文において証明したように〔★7〕、一八五〇年の春には、一八四八年の「社会」革命から発生したブルジョア共和制の発展は、大ブルジョアジー——おまけに王政派的傾向の——の手中に支配の実権を集中した一方では、その他のすべての社会階級を——農民をも小ブルジョアをも——プロレタリアートの周囲に結集しており、そのための共同の勝利のさいにもそのあとでも、彼ら〔農民や小ブルジョア〕ではなくて、経験によつて賢くなったプロレタリアートが決定的な因子とならざるをえないような情勢であったとすれば——その場合、少数者の革命を多数者の革命に転化させる見通しがごとく備わっていたではないか？

(14) 歴史は、われわれおよびわれわれと同じように考えたすべての人々の考えを誤りとした。歴史は、大陸における経済発達の水準が、当時まだどうい資本主義的生産を廃止しうるほどに成熟していなかったことを明白にした。歴史は、これを一八四八年いらい全大陸をまきこんだ経済革命によつて証明した。この経済革命によつて、フランス、オーストリア、ハンガリー、ポーランド、また最近ではロシアにも、ようやくほんとうの大工業が根をおろし、そしてドイツはまさに第一級の工業国になったのである。——以上のことはすべて資本主義的な基礎のうえで、したがつて一八四八年にはまだ大いに伸びる力をもっていた基礎のうえで、起こつた。しかし、まさにこの産業革命こそ、いたるところで階級関係をはじめてはつきりさせ、マニユファクチュア時代から、そして東ヨーロッパでは同職組合手工業時代からさえ、ひきついで多くの中間的

存在を除去して、ほんとうのブルジョアジーとほんとうの大工業プロレタリアートを生みだし、彼らを社会発達の前面へ押し出したのである。ところがこれによつて一八四八年には、イギリス以外ではただパリとせいぜい二、三の大工業中心地に起こつたにすぎない、この二大階級間の闘争が、ようやく全ヨーロッパにひろがり、一八四八年には考えられもなかったほどの激しさに達した。当時はそれぞれの万病特效薬を説くあいまいな宗派的福音がたくさんあったが、今日では一般に承認された、透徹明晰な、闘争の究極目的をはつきり定式化しているただ一つのマルクスの理論がある。当時は地域と民族によつて区別されていて、共通の苦しみの感情だけで結びついている、未発達な、感激と絶望のあいだを途方にくれてさまよっている大衆がいたが、今日では、やすみなく前進し、日ごとに数と組織と規律と洞察と勝利の確信をたかめつつある、一つの社会主義者の大国際軍がある。この強力なプロレタリアート軍さえも、いまだにその目標を達成していない。しかもいま彼らが一度の打撃で勝利を獲得することは思いもよらず、きびしい、ねばり強い闘争によつて一陣地より一陣地へと徐々に前進しなければならぬとすれば、そのことは、一八四八年にたんなる奇襲によつて社会改造に成功することがいかに不可能であったかを、決定的に証明するものである。

(15) 王朝的君主主義的二分派〔★8〕に分裂してはいたが、なによりも彼らの金銭業務のため安寧と安全を欲していたブルジョアジーが一方にあり、それに対立して、なるほど敗北はしたものの依然として脅威となつてプロレタリアートがあつて、その周囲に小ブルジョアと農民がますます結集していた——たえず暴力的爆発の脅威はあつたが、それにもかかわらず、その爆発は終局的解決の見通しをすこしも与えない——こういう状態こそ、第三の、にせ民主主義的王位僭望者、ルイ・ボナパルトのクーデタにとつて、まことにおあつらえむきの情勢であつた。この男は、一八五一年一月二日に軍隊をもちいてこの緊迫した情勢に結

末をつけ、ヨーロッパに国内的安寧を確保したが、その代わりに戦争の新時代(★9)をもたらしした。下からの革命はひとまず終わって、上からの革命の時期が始まったのである。

(16) 一八五一年の帝政主義的な反動は、当時のプロレタリアートの抱負がまだ成熟していなかったことをあらためて証明したものであった。しかし、その反動そのものは、プロレタリアートの抱負が成熟せざるをえない諸条件をつくりだしたのであった。国内の安寧は、産業のあらたな活況が十分のびるための保証になった。軍隊に働く場所を与え革命的潮流を国外にそらさせるという必要は戦争を生んだ。すなわち、ボナパルトは「民族原理」(★10)を貫徹するという口実のもとにフランスのための他国領土の併合をたくらんだ。彼の模倣者ビスマルクも、プロイセンのために同じ政策を採用し、一八六六年に彼のクーデタ、彼の上からの革命を、ドイツ連邦とオーストリアとにたいして遂行した。同様にまたプロイセンの紛争議会にたいしてもこれをおこなった。ところがヨーロッパは二人のボナパルトのためには狭すぎた。歴史の皮肉によって、ビスマルクがボナパルトを倒して、プロイセン国王ヴィルヘルムが小ドイツ帝国だけでなくフランス共和国をも建設することになったのである。だが、その総体的な結果は、ヨーロッパで、ポーランドを除いては、大きな民族の独立と国内的統一が事実となったことである。もちろんまだこれは比較的せまい範囲内のことではあったが、ともかく民族的な紛争がもはや労働者階級の発展過程にとって本質的な障害にならない程度にはなっていた。一八四八年の革命の墓掘り人は、その革命の遺言執行人となった。そして彼らのそばに、脅威的に、一八四八年の相続人であるプロレタリアートが、インタナショナルに結成されて立ち上がっていた。

(17) 一八七〇〜七一年の戦争後にボナパルトは舞台から退き、ビスマルクの使命も終わった。そこで彼はもとのただの土地貴族ユンカーになりさがってもよかった。しかし、この時期の結末をつけたものはパリ・コミューンであった。パリの国民軍からその大砲を盗もうとしたティエールの陰険な企ては勝利の蜂起をよびおこした。またもや、パリではもうプロレタリア革命以外のどんな革命もありえないことが示された。支配権は、勝利ののち、まったくひとりで、まったく争われることもなく、労働者階級の手にはいった。そして、本書に叙述してある時代から二〇年たったその当時でさえ、まだ労働者階級のこうした支配が、いかに不可能であったかが、またもや示された。一方ではフランスがパリを見すてて、マクドマオン(パリ・コミューンの鎮圧作戦を指揮した司令官)の弾丸のもとにパリが血を流すのを傍観していたし、他方では、コミューンはブルンキ派(多数派)とブルードン派(少数派)の二派に分かれて無益な争いをして力を使い果たし、両派とも何をなすべきかを知らなかった。一八四八年の奇襲が実を結ばなかったように、一八七一年のさすかた勝利も実を結ばなかった。

(18) パリ・コミューンの敗北とともに、戦闘的なプロレタリアートも最終的にほうむりさられたかと、一般には思われた。ところがどうして、逆にコミューンとドイツフランス戦争をさかいたとして、プロレタリアートのきわめて力づよい発展が始まったのだ。兵役にたえる全国民が、百万単位をもつてのみ数えられる軍隊に編制されたこと、未曾有の効力をもつ火器、弾丸および爆薬によって、軍事全般が徹底の変革をとげた結果、一方ではボナパルト式の戦争時代は急速に終結をつけ、そして今後は未曾有の残虐な、結末の予測が全然つかない世界戦争以外のいかなる戦争も不可能になったので、平和な産業の発達は保証された。しかしまた他方では、幾何級数的に増大する軍事費によって、租税が法外な高額に引き上げられ、そのため貧しい人民階級が社会主義の手中に駆りたてられた。気違いじみた軍備競争の直接の原因となったアルザス・ロレーヌの併合は、フランスとドイツのブルジョアジーのあいだでは相互の排外熱をあおりたてたかもしれない

が、両国の労働者にとっては、それは団結の新しいきずなとなった。そしてパリ・コミューンの記念日はプロレタリアート全体の最初の共同の祭日となった。

(19) 一八七〇〜七一年の戦争とコミューンの敗北は、マルクスが予言したように、ヨーロッパの労働運動の重点を、しばらくのあいだフランスからドイツへ移した。フランスではもちろん、一八七一年五月の出血から回復するまでには何年もかかった。ところがドイツでは、工業が——おまけにフランスからとった数十億の金のおかげで、まるで温室づくりのように助成されて——いよいよ急速に発達したが、それよりもさらに迅速に、さらに根づよく社会民主党は成長した。ドイツの労働者が一八六六年に実施された普通選挙権を賢明に利用したおかげで、党の驚くべき成長は争う余地のない数字となって公然と全世界に示された。すなわち、一八七一年——一〇万二〇〇〇票、一八七四年——三万五二〇〇〇票、一八七七年——四万九三〇〇〇票、という社会民主党の得票である。つづいて、この発展を政府当局も認めた証拠が、あの社会主義者取締法の形でやってきた。党は一時ばらばらになり、得票数は一八八一年には三万二〇〇〇票に低減した。しかしそれは迅速に克服されて、いまや例外法の抑圧下に、新聞もたず、公然の組織もなく、結社権も集会権ももないで、党はいよいよ急速な拡大を始めた。すなわち、一八八四年——五万五票、一八八七年——七万三〇〇〇票、一八九〇年——四二万七〇〇〇票、そこで国家の手も萎えた。社会主義者取締法は消滅し、社会主義者の得票数は一七八七〇〇〇票となり、全投票者数の四分の一以上に増加した。政府と支配階級は、あらゆる手段をもちいつくした。——けれども、それは、無益で、無意味で、不成功であった。夜警から帝国宰相にいたるまでの官憲が彼らの無力のはっきりした証拠を見せつけられて、がまんしていなければならなかった——しかも、それは軽蔑している労働者から——が、そういう証拠は、幾百万をもって数えられ

た。国家は万策つきた形だが、労働者は万事これから始まるというところであった。

(20) だが、そのうえ、ドイツの労働者は、彼らの第一の貢献、すなわち、もつとも強力な、もつとも規律のある、もつとも急速に増大する社会主義政党として存在しているという貢献に加えて、彼らの事業のためのさらに第二の貢献をおこなった。彼らは、万国の同志に、ドイツの労働者は、普通選挙権はどう使われるものかを、万国の同志に示して、彼らに一つの新しい武器を、もつとも鋭い武器の一つを、供給したのである。

(21) 普通選挙権は、フランスでは、ずっと以前から存在していたが、ボナパルト政府がそれを悪用したので、評判を落としていた。コミューンののちには、それを利用する労働者党が存在していなかった。スペインにも共和制の成立以来普通選挙権はあったけれども(★11)、スペインではすべてのまじめな反政府党は、選挙には棄権することが、従来のみまりになっていた。スイスの普通選挙権の経験も、けっして労働者党に激励を与えるようなものではなかった。ラテン系諸国の革命的労働者は選挙権の一つのわな、政府のごまかしの道具である、と見るならわしがあつた。ドイツでは、これと違って、すでに「共産党宣言」が、普通選挙権の獲得、民主主義をたたかいることを、戦闘的プロレタリアートの第一の、もつとも重要な任務の一つとして宣言していた(★12)。そしてラサールもこの点をふたたびとりあげた。そこでビスマルクが、自分の計画にたいして人民大衆の関心をひきつける唯一の手段として、この選挙権を実施するほかなくなつたとき、わが国の労働者は、すぐさまこれをまじめにとりあげて、最初の憲法制定議会にアウグスト・ベールを送りこんだ。そしてその時以来、彼らは選挙権をたくみに使つて、数えきれないほどの利益をえ、万国の労働者のために模範として役だつてきたのである。彼らは選挙権を、フランスのマルクス主義者の綱領(「マルクスが執筆したフランス労働党綱領の前文・本書収録」)のことはでいえば、——これまでは欺瞞の手段で

あつたものから、解放の道具に転化させたのである。そして、たとえ普通選挙権が次のような利益しか与えなかつたとしても——すなわち、われわれが三年ごとに味方の人数を数えられるようにしてくれたこと、得票数の増加を定期的に確かめ、しかも予想外に急速な増加を知って、労働者が勝利の確信を高めるとともに、敵の恐怖をも強め、われわれの最良の宣伝手段となつたこと、われわれ自身の人数もすべての反対党の人数も正確に知らせてくれ、それによってわれわれの行動の釣合いを保つうえでまたとない基準を与え、われわれを時宜をえない躊躇^{ちゆうちゆうしよんじん}逡巡と、同じく時宜をえない蛮勇から守つてくれたこと——これがわれわれの選挙から得る唯一の利益であるとしても、それだけでも十分すぎるほど十分だろう。ところが選挙権はただそれよりもずっと多くのことをしたのだ。それは選挙の扇動という形で、人民大衆がまだわれわれより遠ざかっている場所では彼らと接触する絶好の手段を与え、またすべての党派が、われわれの攻撃にたいして全人民のまえで彼らの意見と行動とを弁護せざるをえないようにする、またとない手段を与えてくれた。さらにそのうえ普通選挙権は、国会内のわれわれの代表者に、新聞や集会でおこなうのとはまったく別の権威と自由をもつて、議会内の敵や議会外の大衆に話しかけることができる演壇をひらいてくれたのだ。政府とブルジョアジーにとっては、彼らの社会主義者取締法も、選挙の扇動や社会主義者の国会演説がたえずこの法律を突破しつづけているときには、なんの役にたつてあろうか？

(22) ところが、普通選挙権がこのように有効に利用されるとともに、プロレタリアートのまったく新しい一闘争方法がもちいらはじめ、その方法は急速に発達した。ブルジョアジーの支配がそのなかに組織されていくところの種々の国家機関は、労働者階級がそれを利用してこの国家機関そのものとたたかうことのできる、さらにもっと多くの手がかりを与えるものだ、ということがわかつた。労働者は各邦議会や市町村議会

や産業仲裁裁判所の選挙に参加した。彼らは、その選任についてプロレタリアートのかなり大きな部分が投票権をもっている部署であれば、どんな部署をもブルジョアジーと争つた。そこで、ブルジョアジーと政府は、労働者党の非合法活動よりも合法活動をはるかにおそれ、反乱の結果よりも選挙の結果をはるかに多くおそれるようになった。

(23) そのわけは、この点でも闘争の条件が根本的に変わってしまったからである。あの旧式な反乱、つまり一八四八年まではどこでも最後の勝敗を決めたバリケードによる市街戦は、はなはだしく時代おくれとなつていた。

(24) われわれは次の点について幻想をもたぬようにしよう。すなわち、蜂起が市街戦で、軍隊にたいしてほんとうの勝利を得ること、二つの軍隊間におけるような勝利を得ることは、非常にまれなことなのである。だが、反乱者にしてもまた、そういうことをめざしたことはやはりまれであつた。彼らにとつて重要なことは、精神的影響によつて、すなわち、二つの交戦国の軍隊間の戦闘ではまったく作用しないか、もしくははるかに微弱にしか作用しない、あの精神的影響によつて、軍隊を脆弱^{ぜいじやく}化させることだけであつた。これが成功すれば、軍隊がいうことをきかなくなるか、あるいは指揮官が思慮分別を失つて、蜂起は勝利する。それが成功しなければ、軍隊側が少数の場合でさえ、よりすぐれた装備と訓練や統一的指揮と戦闘力の計画的な使用や軍紀の点での優越がものを言うのだ。反乱者側が、ほんとうに戦術的な行動でなしうることを言えれば、せいぜい一つ一つのバリケードを本式に構築して、これを防御することだけである。相互の支援、予備隊の配置ないしは運用、つまり一つの大都市全体の防御にはもちろん、すでに一市区の防御にさえ必要不可欠な個々の部隊の協力と組合せも、きわめて不十分にしかならないか、もしくは多くの場合全然できないだ

ろう。したがって戦闘力を決定的な一地点に集中することなどは、思いもよらないこととなる。だから受動的な防衛が主要な戦闘形態であって、攻撃は、どこどころで、ただ例外的に、ときおり突撃や側面攻撃にふるい立つだけで、普通は退却する軍隊が放棄した地点を占領することだけに限られるだろう。おまけに、軍隊側は火砲や完全に武装し訓練された工兵隊を駆使しうるのに、反乱者側は、ほとんどすべての場合にこいう戦闘手段をまったくもっていない。だから最大の英雄的勇気を發揮してたたかったバリケード戦——一八四八年六月のパリ、一八四八年一〇月のウィーン、一八四九年五月のドレスデン——でさえ、攻撃軍の指揮官が政治的な考慮にわずらわされずに純軍事的観点から行動し、しかも部下の兵士が信頼できた場合には、蜂起は敗北をもって終わったことは、なんの不思議もない。

(25) 一八四八年までの反乱者の多くの勝利は、きわめてさまざまな原因によるものである。一八三〇年七月「七月革命」と一八四八年二月「二月革命」のバリでも、たいていのスペインの市街戦でも、反乱者と軍隊のあいだに市民軍がいたが、彼らは直接に蜂起の側に味方したか、それともなまぬい、不決断な態度で、軍隊をも同様に動揺させ、おまけに蜂起側に武器まで与えたのである。一八四八年六月のパリのように、この市民軍が蜂起にはじめから反対したところでは、蜂起は敗北した。一八四八年のベルリンで人民が勝利したのは、一つには「三月」一八日の夜から一九日の朝にかけて新卒の部隊がいちじるしく増援されたため、一つには軍隊が疲労しきって給養が悪かったためであり、最後にもう一つ、軍隊の指揮が麻痺させられたためであった。だが、どの場合にも、勝利が得られたのは、軍隊がいうことをきかなくなったためであるか、指揮官が決断力を失うか、それとも思うように腕がふるえない状態であったためである。

(26) だから市街戦の古典時代においてさえ、バリケードは、その物質的效果よりも、精神的効果のほうが大きかった。バリケードは軍隊の堅固さをゆすぶる手段であった。これが成功するまでバリケードをもちこたえれば、勝利が得られたが、そうでない場合は敗北した。へわれわれが将来起こるかもしれない市街戦の成功の機会について研究する場合にも、これが着眼すべき主要点である。

(27) すでに一八四九年には、この成功の機会はかなりとほしかった。ブルジョアジーはいたるところで政府側についていたし、「教養と財産」のある人々は、蜂起の鎮圧にくりだす軍隊を歓迎し、接待した。バリケードはその魔力を失っていた。兵士はバリケードのうしろにもはや「人民」をみないで、反乱者、扇動者、略奪者、財産分割者、社会のくずをみた。そして将校は、だんだん市街戦の戦術隊形に精通してきたので、もう即製の胸壁にむかって、まっすぐに掩護物もなしに突進するようなことはしなくなり、庭園や囲い地や家屋を通り、胸壁を迂回するようになった。そしていまでは、これはすこしたくみにやれば、十中九まで成功した。

(28) だが、そのとき以来もつと非常に多くの変化が起こったが、それらはみな軍隊に有利だった。大都市はいちじるしく大きくなったが、軍隊はさらにそれ以上に大きくなった。パリとベルリンは一八四八年このかた四倍までには拡大しなかったが、その守備隊は四倍以上に拡大している。これらの守備隊は鉄道によって二四時間内に二倍以上にふやすことができ、四八時間内に巨大な軍隊に膨張させることができる。この途方もなく数を増した軍隊の武装が、比較にならぬほど強力になっている。一八四八年には滑腔前装撃銃を使用したが、今日では、小口径後装連発銃を使用しており、後者は前者にくらべて四倍も遠く、十倍も正確に、十倍も早い速度で射撃できる。当時の砲兵隊は比較的効力の弱い実体弾や霰弾を使用したが、今日では撃発榴弾を使用しており、その一弾だけで最良のバリケードを粉碎するに足りるのである。当時は防火壁を突破するためには、工兵隊の鶴嘴を用いたが、今日ではダイナマイト弾がある。

(29)

これに反して、反乱者側では、あらゆる条件が悪くなっている。すべての人民層が共鳴するような蜂起は、ふたたび起こりそうもない。階級闘争において、あらゆる中間層が完全にプロレタリアートの周囲に結集して、ためにブルジョアジーの周囲にむらがる反動政党は逆にほとんどなくなる、というようなことはけつしてあるまい。だから「人民」はつねに分裂して現われるだろう。こうして一八四八年にきわめて効果のあった強力な横杆ていこがなくなった。蜂起者側にくわる退役兵士がふえるにしても、それらの退役兵士を武装することがますます困難となるだろう。銃砲店の猟銃や競技用銃は、——まえもって警察が撃発装置の一部分をとりはずして使用できないようにしていない場合でも——近接戦においてさえ、とうてい兵士の連発銃の敵ではない。一八四八年までは、火薬と鉛とで必要な弾薬を自分でつくることができたが、今日では、薬包が銃ごとには違っている。同じ点は、それがいづれも大工業の精巧製品であって即席にはつくれないということ、だからまたとくにそれに適する弾薬を得ないかぎりは、たいいての銃は役にたたないということだけである。そして最後に、一八四八年以来大都市につくられた新市区は、長い、まっすぐな、幅の広い街路で仕切られているから、新しい銃砲の効力を發揮するにはあつらえむきである。バリケード戦のために、自身ベルリンの北部や東部の新労働者地区を選ぶ革命家がいとしたら、彼は正気ではないだろう。

(30)

（では、将来においては、市街戦はもうなんの役割も演じないというのか？ 断じてそうではない。それはただ、一八四八年以来いろいろな条件が市民の戦士にとつてずっと不利になり、軍隊にとつてずっと有利になった、というだけの意味である。だから、将来の市街戦は、こうした不利な状況を別の諸契機で埋め合わせた場合にのみ勝つことができる。だから、市街戦は、大革命のはじめに起こることは比較的にまれで、むしろ、そのような革命のその後の経過中に起こることのほうが多く、以前よりもっと強大な兵力をもつ

(31)

て企てられなければならないだろう。だが、そのような大きな兵力があれば、あのフランス大革命の全体をつうじてそうであったように、また一八七〇年九月四日や一〇月三二日にパリ〔★13〕でなされたように、きつと受動的なバリケード戦術よりも公然たる攻撃を選ぶであろう。）

さて、それで、読者は、なぜ支配する権力者どもが、銃丸が飛んできたり軍刀がひらめいたりするところへ、ぜひともわれわれを連れだそうと欲するのか、そのわけをおわかりであろうか？ なぜ彼らは、われわれがはじめから敗北することが確かな街頭へいきなり飛び出していかないと行って、いまわれわれを卑怯者だと責めるのか？ なぜ彼らはわれわれに、どうか一度大砲の餌食えじきになつてもらいたいと、あれほど熱心に懇願するのか？

(32)

紳士諸君がいくら懇願し、いくら挑発しても、しよせん無益であり、むだである。それほどにわれわれもばかではない。そんなことがとおれば、彼らはこの次の戦争では、彼らの敵にむかつて、老フリッツ流の横隊隊形か、それともヴァグラムやワートルロー流〔★14〕の数師団の縦隊隊形で、しかも手には燧石銃すいせきじゆうをもつて攻めてきてくれ、と要求することもできるだろう。国民間の戦争の条件も変化した、それに劣らず階級闘争の諸条件も変化した。奇襲の時代、無自覚な大衆の先頭にたった自覚した少数者が遂行した革命の時代は過ぎ去った。社会組織の完全な改造ということになれば、大衆自身がそれに参加し、彼ら自身が、なにが問題になっているか、なんのために彼らは（肉体と生命をささげて）行動するのかわ、すでに理解してなければならぬ。このことをこそ、最近五〇年の歴史がわれわれに教えてくれたのだ。だが、大衆がなにをなすべきかを理解するため——そのためには、長いあいだの根気づよい仕事が必要である。そして、この仕事をこそまさにいまわれわれがおこなっており、しかも敵を絶望におとし入れるところの成功をおさめつつあるのだ。

(33)

ラテン系諸国でも、古い戦術が修正されなければならぬことを、ますます悟ってきている。選挙権を利用してわれわれの手の届くあらゆる部署を獲得するドイツの模範が、どこでも見ならわれており、(用意の整わない攻撃開始は、どこでも影をひそめている。)フランスでは、さすがに一〇〇年以上にもわたり革命につぐ革命で地盤が掘りかえされており、陰謀や蜂起やその他あらゆる革命的行動にそれぞれ参加して活動しなかつたような党は一つもなく、したがってまたフランスでは軍隊は政府にとつてすこしも信用ができず、一般にいろいろの事情が反乱者の奇襲のためには、ドイツにくらべてはるかに有利であるが、そのフランスにおいてさえも、社会主義者は、あらかじめ人民の大多数を、すなわちこの国では農民を、獲得しないかぎり、永続的な勝利はありえない、ということをもますます悟ってきている。宣伝と議会活動という気長な仕事、この国でもまた党の当面の任務として認められている。すでに成果も現われている。たくさん市町村議会を獲得しただけではない。国会でも五〇名の社会主義者が議席を獲得して、彼らはすでに共和国の三つの内閣と一人の大統領を倒した(★15)。ベルギーでも労働者は昨年選挙権を奪取し、全選挙区の四分の一において勝利を得た。スイス、イタリア、デンマークでも、それからブルガリアやルーマニアでさえ、社会主義者を議会へ送りだしている。オーストリアでは、これ以上われわれにたいして国会の門戸を閉ざしておくわけにはいかないといい、あらゆる政党の意見が一致している。われわれがそこへ進出することは確実である。ただ、どの門からはいるか、という問題がまだ論議されているだけである。そしてロシアにおいてさえも、有名なゼムスキー・ソボル(全ロシア身分代表会議)、すなわち若いニコライが無益にもさからっているあの国民議会が招集された場合には、そこへもわれわれの代表が送りこまれることは、もうたしかに期待してよい。

(34)

いうまでもなく、そうだからと言ってわが外国の同志たちが、革命の権利を放棄したわけではけつしてない。それどころか、革命の権利は、すべての近代国家が例外なしにそれにもとづいている唯一の真の「歴史的権利」であって、一七五五年にその貴族革命が「継承協約」(★16)すなわち今日もなお効力をもっている封建制度の光栄ある成文化、をもって終結をつげたメクレンブルクでさえ、その例外ではない。革命の権利は、一般世人の意識に、確固として覆しえないものと認められているので、フォン・ボグスラフスキ將軍(反動的言動で有名なプロイセンの將軍)でさえも、彼の皇帝にクーデタをおこなう権利があることを主張するのに、その権利を、もっぱらこの人民の権利からひきだしているほどである。

(35)

だが、他の国々でなにが起ころうと、ドイツ社会民主党は一つの特別な立場をもち、したがってすくなくとも当面また特別な一任務をもっている。同党が投票所における二〇〇万の有権者と彼らのうしろに従っている選挙権のない青年や女性は、国際プロレタリア軍のもっとも多数の、もっとも密集した集団であって、決定的な「強力部隊」である。この集団は、いまでもすでに総投票数の四分の一以上の票を占めている。そしてその数は、国会の補欠選挙や各邦議会の選挙や市町村議会および産業仲裁裁判所の選挙が証明しているように、たえまなく増加している。その成長は、まるで自然過程のように、自然発生的に、恒常的に、制止しがたく、同時にきわめて穏やかにすすんでいる。これにたいしては政府の干渉もすべて無力なことが明らかになった。もう今日でもわれわれは二二五万人の有権者をあてにすることができる。この勢いですすめば、われわれは、今世紀の終わりまでには、社会の中間層、小ブルジョアや小農民の大多数を獲得して、国内の決定的な勢力に成長し、他のすべての勢力は、欲すると欲しないとにかかわらず、これに屈しなければならなくなる。この成長を不断に進行させて、ついにはおのずから今日の統治制度の手におえないまでにす

ること、(この日々増強する強力部隊を前哨戦で消耗させないで決戦の日まで無傷のまま保っておくこと)これがわれわれの主要任務である。そしてドイツの社会主義的戦闘力のこの不断の成長を、一時おさえとめ、しばらくでも退却させることのできる手段は一つしかない。それは軍隊との大規模な衝突であり、一八七一年のパリにおけるような出血である。それも時がたてば回復しよう。百万単位で数えられる一政党をこの世界から追いはらうことは、ヨーロッパとアメリカの連発銃を全部もってきても、できないだろう。しかし、そのときは、正常な発達は妨げられ、(おそらく危機的な瞬間に強力部隊を使用できず、)決戦はおくられ延期されて、より重大な犠牲をとまうだろう。

(36) 世界史の皮肉は、すべてのものをさかだちさせる。われわれ「革命家」、「転覆者」は非合法手段や転覆によるよりも、むしろ合法手段をもちいるときに、はるかに威勢よくさかえるのである。みずから秩序党(オデロン・バロが代表したフランスの王党派連合のこと)と名のついている諸党は、彼ら自身がつくりだした法治状態のために滅んでゆく。彼らは絶望的にオデロン・バロのことばで叫ぶ。合法性がわれわれを殺す(本書一九四ページの注参照)、と。ところがわれわれは、この合法性のもとで、筋肉ははりきり、頬は赤く、まるで永遠の生命の観を呈している。そこでもしわれわれが、彼らの気にいるように市街戦に駆りだされるほどに狂気じみていないならば、そのときは彼らとしては、この宿命的な合法性を自分でぶちこわすよりはかはなくなるだろう。

(37) さしあたり彼らは転覆を弾圧する新法律をつくる。またもすべてがさかだちしている。これらの、今日の転覆活動取締りの狂信者たちは、彼ら自身きのうの転覆者ではなかったか? 一八六六年の内乱をひきおこしたのはわれわれであったか? ハノーヴァー王やヘッセン選帝侯やナッサウ公をその祖先伝来の正統の世襲領地から追いだして、これらの世襲領地を併合したのはわれわれであるか? (★17) そしてこれらのドイツ連邦の転覆者、神の恩寵による三つの王座の転覆者たちが、転覆について苦情をならべるのか? グラックス兄弟(ともに古代ローマの護民官)が暴動を嘆くのを、だれが黙って聞くだろうか? ビスマルクの崇拜者どもが転覆をのしるのを、だれが許すことができるか?

しかし、彼らとその転覆取締法案を通過させ、それをもっと改悪し、全刑法を弾性ゴム(かつてに拡張解積できるもの)に変化させようと思うならば、そうしてみるがよからう。彼らは自己の無力をあらたに証明する以外にはなんの成果も得ないだろう。社会民主党を本気に攻撃しようと思えば、彼らはさらに、まったく違った対策を講じなければならぬだろう。ちょうどいまは法律を守ることがさぶる有利である社会民主党的転覆活動を取り押えるには、法律を破らずには生きられない秩序的な転覆をやるほかはない。プロイセンの官僚リースラー氏とプロイセンの將軍フォン・ボグスラフスキ氏は、どうしても市街戦におびきだされない労働者を、あるいはまだ取り押えることができるかもしれないただ一つの道を彼らに示した。憲法の破棄、全権、絶対主義への復帰、国王の意志は最高の法律! である。では紳士諸君、勇気を出せ、口をとがらせただけではだめだ、口笛を吹かなければだめだ!

(39) だが諸君は忘れてはいけない。ドイツ帝国も、すべての小国や一般にすべての近代国家と同様に、契約の所産であるということ。第一には王侯相互間の、第二には王侯と人民のあいだの契約の所産であるということ。一方の側で契約を破れば、その契約は全部解消し、他方の側でもそれに拘束されない。(それは一八六六年にビスマルクがみごとにわれわれに見せてくれたとおりだ。だから、諸君がドイツ国憲法を破棄すれば、社会民主党も自由になって、諸君にたいして好きな行動をとることができる。しかし、そのとき党が

何をするか——そいつはいま諸君に洩らすわけにはいかない。」

(40) さて、いまから約一六〇〇年まえのこと、ローマ帝国にも同じように、危険な一つの転覆党が活動していた。この党は宗教と国家のあらゆる土台を掘りくずした。それはまっとうから皇帝の意志が最高の法律であることを否定した。それは祖国をもたず、国際的であり、ガリアからアジアまでの帝国の全領土にひろがり、国境外にもひろがった。それは長いあいだ地下で、隠れて掘りつづけていたが、すでにかなり久しいまえから、公然と姿を現わせるほどに十分強くなっていた。キリスト教徒という名で知られていたこの転覆党は、軍隊のなかにも大ぜいの信者をもち、全部がキリスト教徒になっていた軍団もあった。彼らが国教会の、異教の犠牲祭に参列を命ぜられた場合には、この転覆者^{II}兵士はまことに大胆不敵にも、彼らの兜かぶとに特別な徽章——十字架——をつけて、これに抗議したのであった。上官のいつもの兵營の懲罰でさえ、なんの効果もなかった。皇帝ディオクレティアヌス（ローマ皇帝・在位二八四—三〇五年）は、彼の軍隊の秩序や服従や規律が掘りくずされるのを、もうこれ以上平気で見ておくことはできなかつた。まだ手おくれにならないうちに、彼は猛烈な干渉をした。彼は社会主義者取締り——いや失礼——キリスト教徒取締法を發布した。転覆者の集会は禁止され、彼らの集会場は閉鎖され、それどころかぶちこわされたりもした。十字架などのキリスト教の徽章は、ザクセンで赤いハンカチーフが禁止されたように、禁止された。キリスト教徒は官職につくことはできない、と宣言された。彼らは最下級の下士官にさえもなれなかつた。当時はまだフォン・ケラー氏（プロイセンの内務相）の転覆活動取締法案が前提としていような、「人の分けへだて」についてよく仕込まれた裁判官はまだいなかつたので、キリスト教徒が法廷で彼の言い分を主張することも、あつさり禁止した。だが、この例外法もやはりききめがなかつた。キリスト教徒は嘲笑して、それを壁からひ

きちぎつた。それどころか彼らはニコメディア（トルコ北西部の古代都市で、当時、ローマ皇帝の在所となつていた）の皇帝の宮殿に放火したということである。そこで、皇帝はキリスト紀元三〇三年に、キリスト教徒の大迫害をおこなつて、その復讐をした。が、これがこの種の迫害の最後のものではあつた。しかも、それはまことに効果があつたので、一七年後には軍隊は圧倒的多数のキリスト教徒からなりたつていたし、次のローマ帝国の専制君主で、坊主どもから大帝とよばれたコンスタンティヌス（一世、ローマ皇帝・在位三〇六—三三七年）はキリスト教を国教と宣言したのである。

ロンドン、一八九五年三月六日

F・エンゲルス

（中原稔生訳）

★1 新しい例外法 このころ、ドイツ政府は、転覆活動取締法案と呼ばれた新しい例外法を帝国議会にもちだしていた（九四年一二月提出）。これには、ブルジョア諸党の多数の議員も賛成せず、九五年五月に否決された。

★2 「新ライン新聞」 一八四八年のドイツ革命のなかで、マルクス、エンゲルスがドイツのケルンで発行した革命的民主主義の機関紙。四八年六月一日創刊、激しい弾圧のなかで翌四九年五月一九日、赤刷り

の終刊号をもって、その歴史を閉じた。

★3 恐慌と革命 マルクス、エンゲルスは、一八五七年の恐慌を経験して以後、恐慌と革命を直結させるこの見方を捨てた。

★4 ザクセンヴァルト ハンブルクの近くにあるビスマルクの領地。一八七一年に皇帝ヴィルヘルム一世から贈与されたもの。

★5 名義上の臨時未来政府 その国のいかなる現実の勢力をも代表していないのに、亡命者たちが勝手に「革命政府」とか「臨時政府」とかを名乗っていること。一八四八〜四九年の革命の敗北後には、俗流民主主義派の亡命者によるこの種の「名義上の臨時政府」があちこちでつくられ、それらを結集したヨーロッパ規模の「臨時政府」の発足さえ宣言された。マルクス、エンゲルスは、この種の企てにただちに痛烈な批判を加えた（『新ライン新聞』誌上の「評論、一八五〇年五〜一〇月」全集⑦）。

★6 一七世紀のイギリス大革命 一七世紀のイギリスのブルジョア革命は、ピューリタン革命（一六四〇〜六〇年）と名誉革命（一六八八〜八九年）の二つの段階を経て、進化した。

★7 マルクスの第三論文での証明 第三論文とは、現行の『フランスにおける階級闘争』の「第三章 一八四九年六月一三日の結果」のこと。マルクスは、ここで、二月革命が生みだしたブルジョア共和制のもとで、プロレタリアートを中心とした人民諸階級の新たな革命的結集が進んでいると分析し、論文の最後を、革命の接近を予告する次の文章で結んでいた。

「彼ら〔連合ブルジョア分派のこと〕の共和制のただ一つの功績は、革命の温床になったということであった。

一八五〇年三月一〇日には次の銘がしるされている。
わがあとに大洪水あらん！」（全集⑦九二ページ）

★8 王朝的君主主義的二分派 当時、フランスの王党派は、復古王政時代（一八一四〜三〇年）に権力の座にあったブルボン王朝の復活を求める「正統王朝派」と、七月王政時代（一八三〇〜四八年）に王位にあったオルレアン王朝の復位を求める「オルレアン派」とに分かれていた。

★9 戦争の新時代 ボナパルト帝政の時代（一八五二〜七〇年）は、ボナパルトの領土拡張主義を推進力として、ヨーロッパや世界各地での征服戦争の絶えない、文字通りの「戦争の新時代」だった。主な戦争は次の通り。クリミア戦争（一八五四〜五五年）、イタリアをめぐるオーストリアとの戦争（一八五九年）、英仏共同の対中国第二次アヘン戦争（一八五六〜五八年）、インドシナとシリアへの征服戦争（一八六〇〜六一年）、メキシコ遠征（一八六二〜六七七年）、フランス・プロイセン戦争（一八七〇年）。

★10 「民族原理」 フランスのボナパルト帝政がとねた「原理」。民族の自決権の擁護・承認とは無縁のこと、フランスの領土拡大や覇権強化のために、他国の支配下にある被抑圧諸民族の擁護者をよそおったり、あちこちで民族的争いをかきたてたりするものだった。

★11 スペインの普通選挙権 スペインでは、一八六八〜七四年のブルジョア革命のなかで、一八六八年以来、普通選挙権が実施された。共和制は、一八七三年に布告されたが、一八七四年、王党派のクーデターで廃止された。

★12 「共産党宣言」と普通選挙権 「共産党宣言」が普通選挙権をプロレタリアートの任務とした、というのはエンゲルスの誤解。普通選挙権を要求にかかげたのは、マルクス、エンゲルスが一八四八年三月に発表した「ドイツにおける共産党の要求」だった。

★13 九月四日や一〇月三十一日のパリ 九月四日は、一八七〇年、パリ人民が、スタンでのフランス軍の敗北の報をきいて決起し、帝政の転覆と第二共和制の樹立を宣言したこと。一〇月三十一日は、ブランキの

指導のもとに一部の労働者と国民軍兵士がパリ市庁舎を占領した蜂起で、失敗に終わったこと。ブランキ（一八〇五～八一）は、少数の戦士による陰謀的な蜂起の組織に熱中する革命家だった。

★14 ヴァグラムやワテロー流 ヴァグラムは、ナポレオンがオーストリア軍を破った一八〇九年の会戦。ワテローは、ナポレオンが、イギリス、オランダ、プロイセンの軍に敗れた一八一五年の会戦。

★15 フランス国会での成果 フランスでは、一八九三年の下院選挙の結果、これまでの社会主義諸派が合計三〇議席という画期的な議席を得た上、急進左派の議員約二〇名が「社会主義者」を名乗って合流した結果、約五〇名という巨大な数の「社会主義」議員団が誕生することになった。このことは、政策的立場ではさまざまな動揺を生みだしてエンゲルスを心配させたが、内閣の交替などの政局的な活動では、社会主義派の役割を格段に大きいものとした。その実績は次の通り。九三年一月、汚職事件の追及でデュピュイ内閣を倒す。九四年五月、後継のカジミール・ペリエ内閣を倒す。九五年一月、第二次デュピュイ内閣を倒し、カジミール・ペリエ大統領を退陣に追い込む。

★16 貴族革命と「継承協約」 エンゲルスはここで、ドイツ史のなかの歴史的事実を引いて、貴族の封建的権力でさえ、もともとは革命の権利を行使して生まれたものであり、「すべての近代国家」が例外なしにその基礎を革命という「歴史的権利」においていることの例証としている。メクレンブルクとはドイツ北部の一地方で、一七世紀にそこにあつた二つの公国で貴族が支配権を要求する革命を起こし、長期の闘争の結果、一八五五年の「継承協約」をもって、今日にいたる封建貴族の支配権が根拠づけられた。

★17 だれが三つの世襲領地を併合したか？ 一八六六年のプロイセン＝オーストリア戦争のあと、これらの領地を併合したのは、ビスマルクを首相とするプロイセン国家だった。本書四九ページ注参照。